

# 地域のために自分で決めて自分で動き出す児童の育成

～新町地域をフィールドにした総合的な学習の時間の「再開発」を通して～

高崎市立新町第一小学校 萩原 靖久

## I 主題設定の理由

令和6年12月に中央教育審議会より、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」が示された。「質の高い探究的な学びの在り方」や「地域や家庭との連携・協働を促進しつつ、カリキュラム・マネジメントを実質化する方策」が論点に示され、探究的な学びの旗頭として、改めて総合的な学習の時間の重要性が高まっている。総合的な学習の時間では、地域の教材や環境を生かした学習活動を取り入れることを重視しており、各学校では、地域のヒト・モノ・コトを教材にした学習が展開されている。しかし同時に、多くの学校で教師が難しさを感じていることでもある。

本校の総合的な学習の時間でも、令和元年度に入るまでは、どの学年の単元も単発的、羅列的な傾向があり、地域との関わりも少なかった。「地域や社会をよくするために何かしてみたいと考えている」児童が県や全国に比べて圧倒的に少なく(図1)、地域のために自分から動く様子も見られなかった。

確かに、多くの学校の中には、指定校や全国大会の会場校などに選ばれ、市町村の教育委員会や地元の大学のサポートを受けながら、校内研修テーマを総合的な学習の時間に設定し、授業改善を実現してきた学校がある。総合的な学習の時間における質の高い探究的な学びを実現するためには、数年に渡る下準備があったことは想像するに余りあるものがあり、教職員の大きな努力があったのは明らかである。

しかしながら、そのような授業を展開できるまでのカリキュラム・マネジメントを土台とした総合的な学習の時間の教材開発及び単元構想に至るまでの現場レベルでの取組は、明らかにされてこなかった。総合的な学習の時間は、教科等の中で唯一、学校独自の教育目標と直接的につながっていたり、学校に根付いた定番教材を用いていたいたりするために、教科等の中でも授業改善の難しさは一頭地を抜いている。いわゆる“普通の”学校で、学級担任として第一線で動いている多くの教職員の関心は、「うちの学校でどうやって『総合』を変えていくのか」であり、質の高い探究的な学びを実現するまでの具体的な手立てである。

そこで、本研究では、総合的な学習の時間の「再開発」に着目し、「地域のために自分で決めて自分で動き出す児童の育成」を主題に設定する。子供と共に単元を展開していく主体として、教職員がどのようなミーティングを行い、どのような手順で、実際の授業に辿り着いたのかを明らかにすることは意義がある。総合的な学習の時間が“うまくいっていない”学校において、どの学校にもある小さな組織「部会」が中心となり、少しずつ「再開発」を進め、社会との連携の中で「地域のために自分で決めて自分で動き出す児童」を育成してきたところに、本研究の独自性がある。

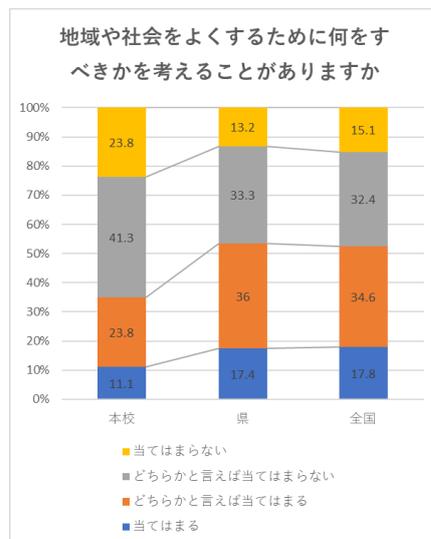


図1 R3年度の全国学力・学習状況調査における児童質問紙「地域貢献」項目の割合

## II 研究仮説

①学校教育目標の見つめ直し、②探究テーマの再設定、③活動フィールド「地域」にする、④探究プロセスを可視化する「一枚紙」(図2)の4つを柱とした総合的な学習の時間の「再開発」を進めることで、児童らは、地域のために自分で決めて自分で動き出すことができるようになるだろう。



図2 第6学年の「一枚紙」(活動写真やワークシートなどを用いて1年間の探究プロセスを示したもの)

検証の視点	検証の方法
①年度末の「まとめ・表現」において、地域のために自分で決めて自分で動き出す姿が見られるか。	R6年度第6学年の学習活動の様子やワークシート
②地域や社会をよくするために何かしてみたいと考えているか。	過去4年間の全国学力・学習状況調査における児童質問紙「地域貢献」項目の結果

図3 検証の視点及び方法

### III 手立て

どの学校にもある総合的な学習の時間の部会(以下、総合部会とする)が中心となり、「再開発」を進める。本校の部会員は、第3学年から第6学年の学級担任4名である。おおよそ3年間をかけて、さまざまな手立てにより、全学年の総合的な学習の時間を再編し、70時間の単元を構想する。

ミーティングの場となる総合部会は、部会員以外の教職員も参加する「拡大総合部会」や、新町中学校区3校による「小中連絡協議会」(同じ中学校区の教職員が情報交換を行う市の取組)を含めると、令和2年度から令和6年度までの5年間で20回、筆者の担当校務分掌である総合的な学習の時間の主任からのC4thにおける授業改善の呼びかけや最新情報の発信などは、5年間で36回である。

全校で進める「再開発」の手立てを、時系列で以下のように示す(図4)。

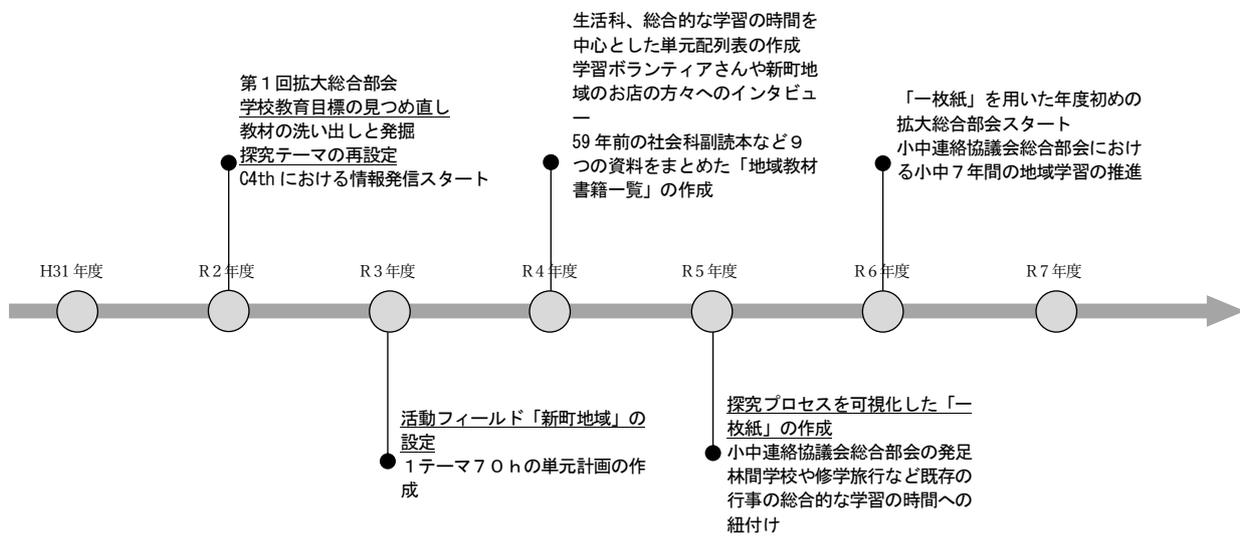
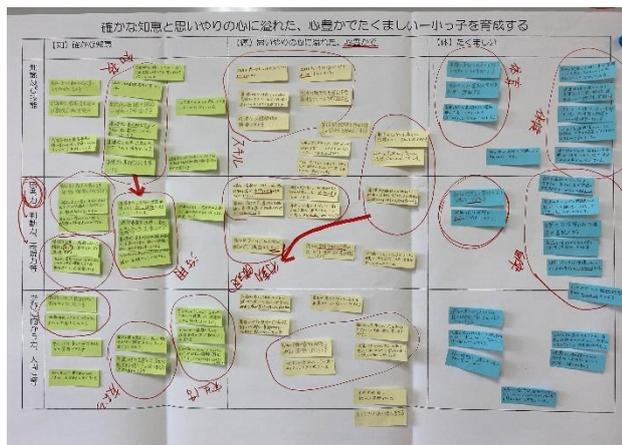


図4 「再開発」の手立て(下線は4つの柱)

#### 1 学校教育目標の見つめ直し

総合的な学習の時間は、教科等の中で唯一、学校独自の教育目標と直接的につながる学習活動である。小学校学習指導要領解説総則編では、「学校の教育目標との関連を図り、児童や学校、地域の実態に応じてふさわしい探究課題を設定することができる」という総合的な学習の時間の特質が、各学校の教育目標の実現に生かされるようにしていくが重要」と示されるなど、カリキュラム・マネジメントの中核としての総合的な学

習の時間の役割は大きい。そこで、各学校で設定されている学校教育目標を、横軸を知・徳・体の3つ、縦軸を知識及び技能・思考力、判断力、表現力等・学びに向かう力、人間性等の3つ、合計で9つのセルから構成されるマトリックス表を用いて見つめ直す（図5）。



教職員から出た意見

【思考力、判断力、表現力等】

「情報を集めたり、場面に応じて選んだりすることができていない」

「相手にとってよりよいことを考えることができる児童がいる。けれど、それを表現できなかったり、実際の行動に移せていなかったりするところがある」

【学びに向かう力、人間性等】

「生活の中から課題を見つけて解決していこうという気持ちが十分でない」

「よりよい生活をつくり出していこうとする気持ちはあるが、得た気づきを実生活につなげられていない」

本校の課題→学校が家庭や地域社会と連携し、社会とつながる協働的な学びを実現していくこと

図5 マトリックス表を用いた学校教育目標の見つめ直し

マトリックス表による分析により、児童らの持ち味やストロングポイント、あるいは十分ではない部分を明らかにすることができる。学級担任だけでなく、管理職にも声を掛けることで、総合的な学習の時間を「再開発」する必要性や、活動の方向性を全職員で共有することができる。

2 探究テーマの再設定

文部科学省（2024）において、渡邊は、「教材や活動が、子供や学校の実態に合わなくなってきたと判断される場合には、地域の人々と問題意識を共有しながら、一緒につくり直していくことも考えられる」と述べている。本校のように、児童の実態に合っていないかったり、探究プロセスが整っていなかったりする場合、長らく取り組まれている教材や活動が行われるようになった経緯や目的を再確認し、探究テーマを改編する（図6）。単発的、羅列的な傾向がある場合には、年間計画をゼロベースで考えていくと、探究プロセスの回り方を想定しやすい。

～H31年度				R2年度～		
各学年の主な学習テーマ				3年	4年	5年
3年	4年	5年	6年	福祉	環境	防災
新町を探索しよう	エコ博士になろう	チャレンジ棒名	よりよい集団を目指して	お年よりにやさしい新町をつくらう	新町のエコ博士になろう	新町の水災害博士になろう
お年よりにやさしい(便利・楽しい・住みやすい)新町をつくらう	昔の新町へタイムスリップ 目の不自由な人に役立つことは？	食の安全について考えよう 6年生の心に残る送る会にしよう	古都・鎌倉研究 卒業文集制作 夢の実現に向けて			
				歴史	新町の歴史を広めよう	

図6 H31年度までの単元を、学習指導要領が示す探究テーマを基に、70時間の単元に改編した実践例（第5学年及び第6学年はゼロベースでつくり直している）

質の高い探究的な学びを実現するためには、教材から学習活動を予想し、それが学校教育目標に資するかを見抜いていく必要があるが、この段階では、「この地域にどのような教材があるか」という視点より、学習指導要領で示されている探究テーマから「この地域にどのような問題がありそうか」という視点で改編を進める方がよいと考える。学習ボランティアや学校運営協議会委員の方々と話をする中で、地域の実情が見えてくる場合もある。

### 3 活動フィールドを「地域」にする

総合部会が選んだ4つのテーマ「福祉」「環境」「防災」「歴史」における今日的な課題は、我々大人も解決することが容易でない。とりわけ、「自分で動き出す」というレベルになると、そう簡単には進まない。そこで、全学年で「地域」を総合的な学習の時間の活動フィールドに設定する。

探究プロセスの「課題の設定」では、保護者からアンケートを取り、地域におけるヒト、モノ、コトとの関わりで見えてくる問題から課題を設定する。「まとめ・表現」では、情報の収集や整理・分析を通して形となったことを発表したり制作物として発信したりする対象を、学校内の他学年だけでなく、課題解決の対象に選んだ保護者や地域在住の人々とする。「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」の一連の探究プロセスの中でも、特に「課題の設定」と「まとめ・表現」を身近な「地域」とつなげることで、日常生活の中に存在する実社会の課題に向けて、小学生でも具体的に「自分で決めて自分で動き出す」ことができるようになると思う（図7）。



- ・お家の人へのアンケート結果から、災害時を想定した避難の準備が十分でなかったり、新町地域の水災害の歴史を知らなかったりするという実態を知る。
- ・クラスのゴールを、来年3月に、お家の人や地域の人が、「水災害について知っている」「水災害の対策をしている」ようになることに設定する（写真上）。

- ・お家の人を「新町水災害フォーラム」に招き、調べてきたことを伝える。「避難行動」「歴史」「治水」「防災グッズ」の4つのブースを設ける。
- ・アンケート結果から課題を整理し、再度、フォーラムを開催する。2回目のフォーラムは、保護者以外の地域の人も招待する（写真上）。
- ・アンケート結果から設定したゴールが、どの程度達成できたのか分析する。

図7 「防災」を探究テーマとした第5学年の「課題の設定」及び「まとめ・表現」の実践例

地域の人的資源を活用し、学校教育を社会との連携の中で実現するためには、「地域」という活動フィールドを隣接する小中学校で揃えられるとよい（図8）。小学校の4年間中学校の3年間の7年間の総合的な学習の時間において、「地域」と粘り強く関わられるようにしていくことが重要である。

高崎市新町という地域は、烏川と神流川という2本の川が流れる面積の小さい街である。洪水が多かったことや宿場町としての歴史があるが、地域活動への参加を促す特別な教育プログラム等はない。

### 4 探究プロセスを可視化する「一枚紙」

白井（2025）は、「焦点となっているのは、題材やテーマがどのようなものかということではなく、探究のプロセスが回っているかどうかということである。つまり、子供たちが、探究の方法論を身につけているかという点を重視している」と、文科省の考え方を整理している。文部科学省（2024）において、渡邊は、「探究過程の可視化は、児童の学習にとって重要であると同時に、教師が子供の学習状況を見極め、次の働きかけを検討することにも資する」と述べている。



図8 令和7年度8月の小中連絡協議会総合部会で各校の取組を紹介する3校の様子

そこで、70時間の探究プロセスを「一枚紙」に可視化する(図2、9、10、11)。教科横断的など、探究の題材やテーマに着目するだけでなく、総合的な学習の時間を「方法論」として捉え、左下から右上へ向かって、探究プロセスが発展的に繰り返される様子を具体的に示す。一覧性に優れている模造紙を使用し、データ化した資料は、教職員が活用している「Google Classroom」に格納し、いつでも見返すことができるようにする。

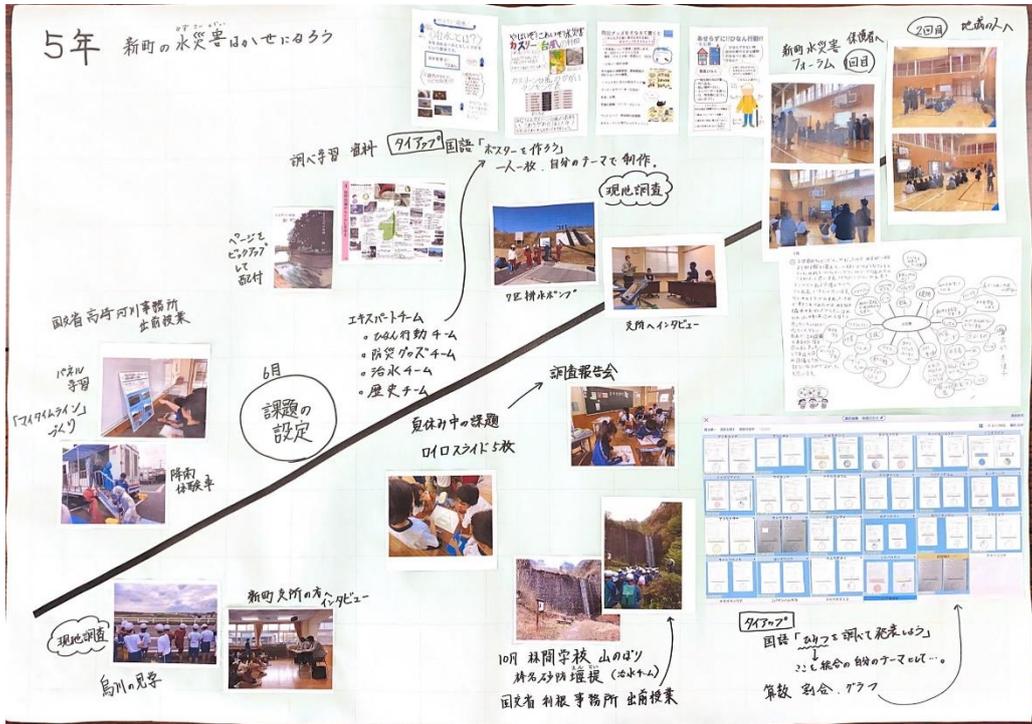


図9 第5学年の「一枚紙」

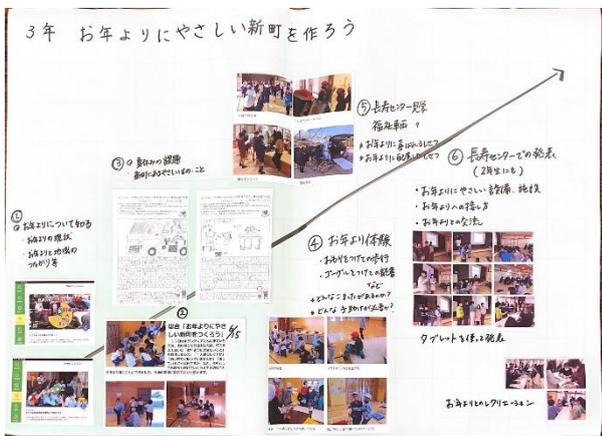


図10 第3学年の「一枚紙」



図11 第4学年の「一枚紙」

また、探究プロセスをアップデートしていくために、「一枚紙」を用いた拡大総合部会を開く(図12)。部会では、前年度の担当教員と今年度の担当教員が「一枚紙」を囲み、一年間の見通しをはじめ、国語科を中心とするタイアップのアイデア、整理・分析過程におけるシンキングツールの活用方法など、具体的な授業展開について話し合う。

本部会は、4月の年度初めの業務が一段落したあとに設定する。全校で総合的な学習の時間をスタートさせる時期を5月の中旬に揃えることで、学級担任が地域の様子を調べたり担当学年の授業



図12 拡大総合部会で新旧の担任らが情報交換を行う様子

の打ち合わせをしたりする時間を捻出することができる。過度な負担が生じないカリキュラム・マネジメントの一つであると言える。

#### IV 実践の概要

紙幅の都合上、本章で示す実践は、令和6年度第6学年のものとする。一年間の流れは、前出の「一枚紙」(図2)に示している。第6学年の主となる探究サイクルは、70時間で2サイクルである。

##### 1 第1学期

5月、児童らは「新町クイズ」に挑戦し、11年間住んでいる自分の街の歴史について、ほとんど知らないことを実感する。お家の人は、新町の歴史をどのくらい知っているのか、クラウド型授業支援アプリケーション「ロイロノート」のアンケート機能により情報を集め、多くの家庭で新町の歴史を知らないという地域の実態に気付く。そこで、新町地域在住の「新町の歴史と文化を学ぶ会」の方々を招き、地域の歴史的文化財について教えてもらう(図13)。地域には多くの歴史的文化財があることや、歴史や文化財が発信できていないという現状を児童らと共有する。

6月中旬、単元を貫く「課題の設定」が行われる。一人一人の意見を基に、ピラミッドチャートを用いて学級のゴールを決める。「新町の人が歴史に興味をもっている」ようになることが6年2組の目標となる。

6月下旬、歴史及び文化財(図18ポスター参照)から関心のあるものを一つ選び、情報の収集を始める。夏休み中に、同じ歴史や文化財を選んだ仲間と現地へ行き、写真を撮ったり宮司にインタビューしたりして情報を集めるチームもあった。

##### 2 第2学期

9月、夏休み中に作成したスライド資料を見せ合い、集めた情報を共有する。その後も情報の収集を進めるが、書籍やインターネットでは分からないことが多かったため、「新町の歴史と文化を学ぶ会」の方々を招いて、現地調査を行う(図14、15)。当日は、ゲストティーチャーらとの交流により、新たな気付きを得る児童が多くいた。

10月、国語科「パンフレットをつくろう」とタイアップし、新町の歴史を地域に広めるための発信方法にパンフレットを選ぶ。およそ2か月間で集めた情報を基に、チームで1冊のパンフレットを制作する。

11月、修学旅行で訪れた鎌倉の「歴史や文化財に人を集める工夫」を整理・分析する。市や寺社、街の人々による魅力の発信の仕方など、実際に見てきたことを自分たちの「歴史を広める」活動に活かせるようにした(図16)。

12月、作成したパンフレットを公開する。保護者だけでなく、地域の人にも読んでもらうために、どこにパンフレットを置くとよいか話し合う。交渉の結果、新町公民館、新町図書館、飲食店「幸屋きよまる」にパンフレットを置いてもらえることとなる(図17、18)。設置後、まもなくして、地域の方から学校へ手紙が届いたり、公民館の館



図13 「新町の歴史と文化を学ぶ会」の方々



図14 「神流川古戦場跡碑」でゲストティーチャーと交流する様子



図15 「於菊稲荷神社」でゲストティーチャーと交流する様子



図16 修学旅行で得た気付きをピラミッドチャートで整理・分析する様子

長より、「利用している団体さんがもっとパンフレットをほしいと言っている」という連絡が来たりするなど、反響がある。パンフレットは増刷され、公民館を利用している45団体に届けた。

### 3 第3学期

1月、集まった320枚のアンケートを集計する(図19、20)。「伝わっていないところがあった」「すごくの回答が61%で保護者のアンケート結果より低い」などの理由から、自分たちのプロジェクトの達成度に70点や80点をつける児童が大半を占める(図21)。そこで、卒業までの残りの2か月間に、発信方法をも自分で決める個人プロジェクトを開始する。具体的な内容をすべて自分で決め、「目標をさらに達成するために私がやりたいこと」として企画書に整理した(図24)。

2月の学習参観において、一人一人が、作成した企画書を保護者にプレゼンテーションする(図22)。親以外の大人達から「街にポスターを貼るのは申請の関係で難しいかもね。例えば、自分の家の壁に貼るのはどうかな」などの助言をもらい、多くの児童が企画を練り直した。

2月下旬より、同じ発信方法を選んだ仲間とグループとなり、具体的に動き出す。学校外における活動を実現させるため、校長室へ行ってやりたい企画を説明したり、スーパーマーケット「フレッセイ新町店」やコンビニエンスストア「セブンイレブン高崎新町笹木境」、和菓子店「とみや菓子店」など、新町地域のお店に自作のポスターを貼ってもらえるよう交渉したりする様子が散見される。個人情報保護の関係上、企画の内容を変更することとなる児童も少なくなかったが、一人一人が思い思いの形でプロジェクトを進めた。

3月中旬、一年間の学習を振り返る。ウェビングマップを用いて、新町地域の歴史や文化財に関する知識をはじめ、協力してくれた人や街の人の思い、自分の思いなどを書き出した。実際に地域のために動き出すことができた自分自身の成長を実感する児童が多くいた。



図17 新町図書館入口に並ぶパンフレット



図18 新町図書館入口に掲示した活動を紹介するポスター

①	パンフレットを見て、新町にある歴史や文化財のことが分かりましたか。
②	パンフレットを見て、好きになった歴史や文化財はありましたか。
③	パンフレットを見て、新町の歴史や文化財に興味もてましたか。以下の選択肢からお選びください。
④	パンフレットを見て、「新町の歴史や文化財をこれからも残していきたい」という気持ちになりましたか。
⑤	パンフレットを見た感想をお願いします。

図19 6月に決めた学級全体のゴールとリンクさせたアンケート項目

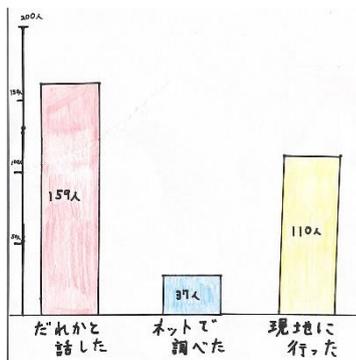


図20 Q3の回答結果をまとめたグラフ(結果は公民館に掲示されている)

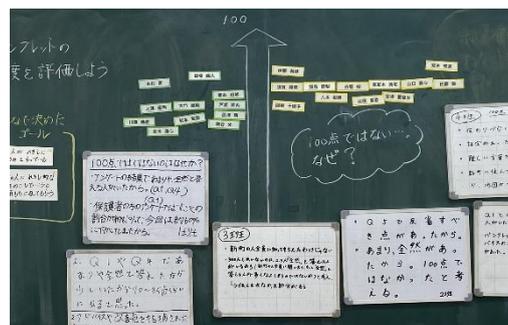


図21 パンフレットを用いたプロジェクトの達成度を分析する様子



図22 保護者に自分の企画を説明して助言をもらう様子

## V 成果の検証

1 検証の視点①：年度末の「まとめ・表現」において、地域のために自分で決めて自分で動き出す姿が見られるか

### (1) 結果

#### ①全体

2月の学習参観時に、企画書を書いて保護者らにプレゼンテーションすることができた児童の割合は100%であった(図23)。3月の卒業式までに、企画したことを実行することができた児童の割合は、88%であった(図23)。3名の児童が、準備等に時間がかかり、企画したことを実行に移すことができなかった。

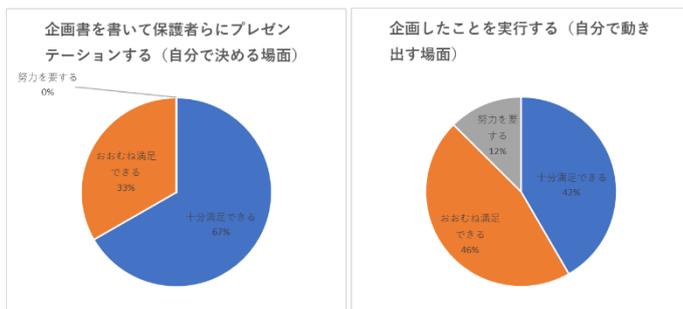


図23 自分で決めて自分で動き出すことができた児童の割合

#### ②抽出児童 (自分で決める場面)

本児童は、新町の歴史や文化財を、パンフレットという媒体を通してだけでなく、相手に直接伝えようとスーパーマーケットにおける「チラシ配り」を企画した。企画書には、実際にチラシ配りを行う具体的な店名や時間帯、チラシの構成などが文字や図によりまとめられた(図24)。

保護者へのプレゼンテーションでは、始めは消極的であったが、友達の様子を見て、しだいに自分から保護者らに声を掛けるようになった。ワークシートの裏面には、アドバイスや得た気づきをまとめた。結局、企画したスーパーマーケットでの「チラシ配り」は、学校の許可が下りなかったため、作成したチラシを校内で配付するなどして、企画したことを実行に移した。

#### ③抽出グループ (自分で動き出す場面)

パンフレットによる発信の結果から、実際に文化財を訪れる人がまだまだ少ないと考えた児童らの中で、4名がグループとなり、「デジタルスタンプラリー」を企画及び運営した(図25)。

スタンプラリーを作成することのできる「てくてくスタンプ」に申し込み、本校のオリジナルキャラクター「みかんりん」「けやっきー」をもとに、タブレットでスタンプをデザインした。「於菊稲荷神社」の宮司に頼んで境内にポスターを掲示させてもらったり(図26)、市が管轄する「神流川古戦場跡碑」には、新町支所から許可をもらい、学校から運んだ台にポスターを設置したりした。授業中だけでなく、放課後や休日にも集まり、神社や市役所と交渉したりwebデザインを考えたりして、役割を分担しながら企画したことを実行に移した。

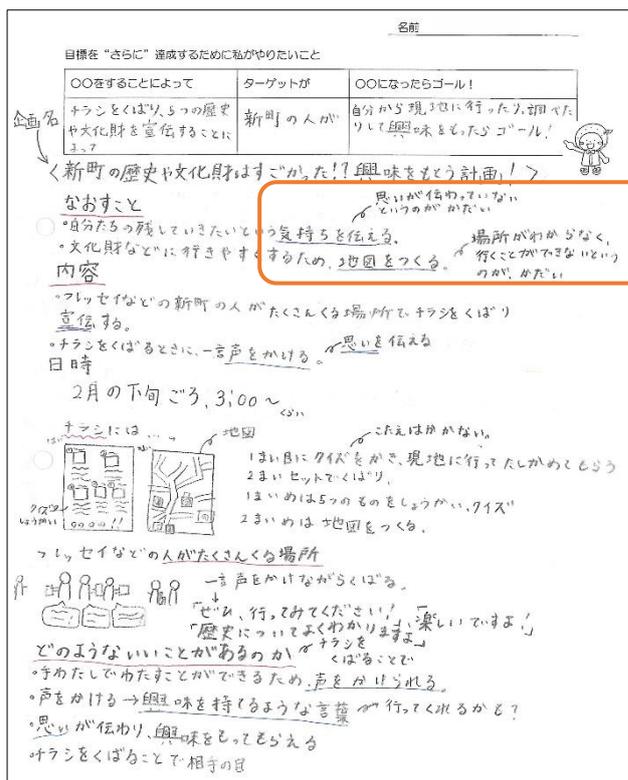


図24 抽出児童の企画書

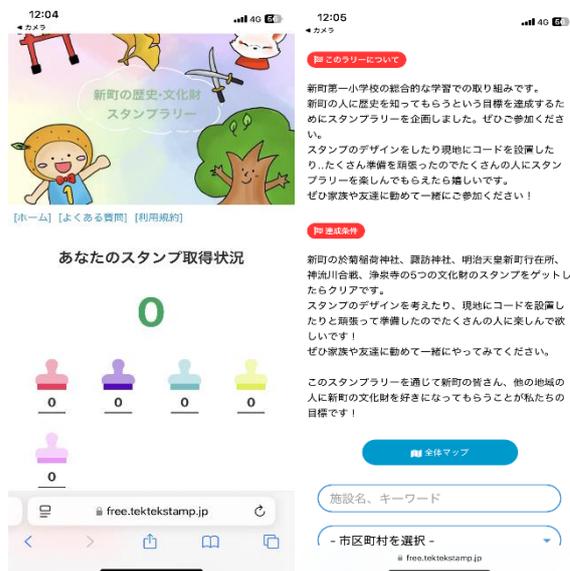


図25 「新町の歴史・文化財スタンプラリー」

## (2) 考察

抽出児童は、自分が考えた企画の許可が下りないという状況に一時は落ち込んでいたものの、企画を練り直し、校内配付という形で、自分で決めたことを実行することができた。企画書の「思いが伝わっていないのがかだい」という記述から分かるように、抽出児童は、新町の歴史を相手に直接伝えることに最後までこだわっていた。「場所がわからなく、行くことができないというのがかだい」という記述からも、アンケートの結果を受け止め(図27)、目標をさらに達成しようとしていることが伺える。

粘り強く課題解決に取り組み、企画を「自分で決める」ことができたのは、総合的な学習の時間の活動フィールドを「地域」にしたことにより、抽出児童の中で課題解決の対象が明確となり、相手意識をもちながら探究的な学びを進めることができたためであると言える。

抽出グループの4名は、保護者へのプレゼンテーションで企画を練り直したり、友達とアイデアを聞き合ったりする中で、自分のやりたいことを見つけることができた。単に仲良しグループで集まって活動するのではなく、自分のやりたいことに合わせて取り組み方を変えるという変化も見られた。4名の児童が「自分で動き出す」ことができたのは、自分たちで決めた目標を達成するために、新しいスキルを身に付け、新しい関係を築き、その過程で新しい役割を引き受けることができたためであると言える。「サイトのプログラムをつくったり、イラストをかいたり、きよかをとったり、現地に行ったり、ポスターやQRの紙をつくったりするなど、たくさんのじゅんぴが必要でたいへんだったけど、友達と協力してできたからすごくうれしかった」とプロジェクトを振り返るなど(図29左)、協働性が育まれたことも伺うことができる。

プロジェクトを進める4名の様子は、本校の課題であった「家庭や地域社会と連携し、社会とつながる協働的な学び」の一つの形であり、「地域のために自分で決めて自分で動き出す」姿そのものであると言える。

以上のことから、総合的な学習の時間の「再開発」のための手立てが有効であったと判断できる。

## 2 検証の視点②：地域や社会をよくするために何かしてみたいと考えているか

### (1) 結果

「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童は、R3年度の34.9%からR6年度の86.5%へ増加した(図28)。R6年度に「当てはまらない」と回答した児童は0%である。

### (2) 考察

全国学力・学習状況調査の対象学年は第6学年、実施時期は4月である。令和6年度第6学年の児童らは、第3学年、第4学年、第5学年において、新町地域をフィールドにした総合的な学習の時間を経験してきた学年であることから、令和6年度の回答結果は、本研究の成果が最も表れている学年集団であると言える。

およそ7割の児童が新町地域に関心がなかった3年前に比べ、「地域や社会をよくするために何かしてみたい」と考える児童が増えたことは、年度末の振り返りシートの記述からも伺うことができる(図29)。



図26 「新町の歴史・文化財スタンプラリー」が行われたら菊福荷神社の境内の様子

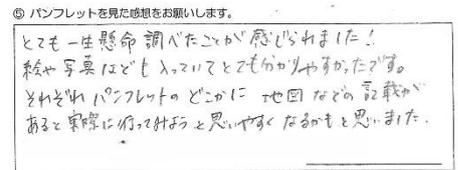


図27 地域の方からの助言が記述されたアンケート

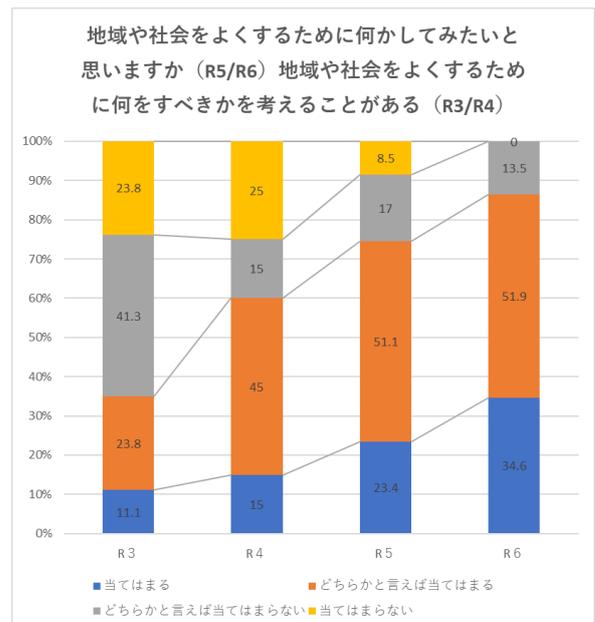


図28 R3年度からR6年度の全国学力・学習状況調査における児童質問紙「地域貢献」項目の割合



また、学校全体で総合的な学習の時間を方法論として捉えたり、学習者も授業者も探究のプロセスが回っているかを重視したりしてきたことにより、探究プロセスを意識して学習を進める児童の割合は、9割を超えた（図 30）。学習者の中には、内容面だけでなく、「自分で考え、行動し、実行にうつすことは、一どのようにしたらせいこうするのか」など、学校教育を終えたあとにも重視される考え方、すなわち転移価値が高い分野に関心をもつ児童も現れるようになった（図 31）。

以上より、新町地域をフィールドにした総合的な学習の時間の「再開発」は、地域のために自分で決めて自分で動き出す児童を育成することに有効であった。

対象児童らは、やがて大人になり、新町で暮らす者や、新町を出て他の街で生活を送る者が出てくるだろう。いずれにせよ、小中学校時代の新町地域をフィールドにした総合的な学習の時間の「自分で決めて自分で動き出した」活動が、子供たちの中に残り続け、地域に貢献しようと自分にできることをしようとする未来があるのだとすれば、これ以上に嬉しいことはない。

## 2 課題

本校の取組は、中教審が示す論点「質の高い探究的な学びの在り方」「地域や家庭との連携・協働を促進しつつ、カリキュラム・マネジメントを実質化する方策」を現場レベルで具現化したものであり、小さな組織「部会」が動いたという点や5年間の手立てを時系列で示したという点で、他校でも実践できる汎用性がある。しかし、本研究が示した「再開発」による結果は、本校に勤めた教職員らの「協働」の成果である。

アンドレアス・シュライヒャー（2019）は、「本質的で永続的な変化を起こしたいならば、何人の教員があなたに賛同するかではなく、何人の教員が効果的な協働を推進できるかを自問すべきである」と述べる。公立学校という職員の流動性が極めて大きい職場で、“声を掛けたらすぐに集まることのできる”組織風土の醸成には時間がかかると言える。

### <参考文献>

- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版社
- 田村学（2017）『カリキュラム・マネジメント入門』東洋館出版社
- 田村学（2019）『「深い学び」を実現するカリキュラム・マネジメント』文溪堂
- アンドレアス・シュライヒャー（2019）『教育のワールドクラス 21世紀の学校システムをつくる』明石書店
- 国立教育政策研究所 教育課程研究センター（2020）『指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料 小学校 総合的な学習の時間』東洋館出版社
- 小川雅裕（2021）『すべての子どもを探究の主人公にする本音で語り合うクラスづくり』東洋館出版社
- 松村英治（2021）『令和時代の総合的な学習の時間入門 教科を超えて活用可能な指導力が向上する！』東洋館出版社
- 文部科学省（2024）『初等教育資料 2024年6月号』（渡邊巧 p.44-47）東洋館出版社
- 文部科学省（2025）『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について詳細版（令和6年12月25日中央教育審議会諮問）』初等中等教育局教育課程課
- 白井俊（2025）『世界の教育はどこへ向かうか 能力・探究・ウェルビーイング』中央公論新社

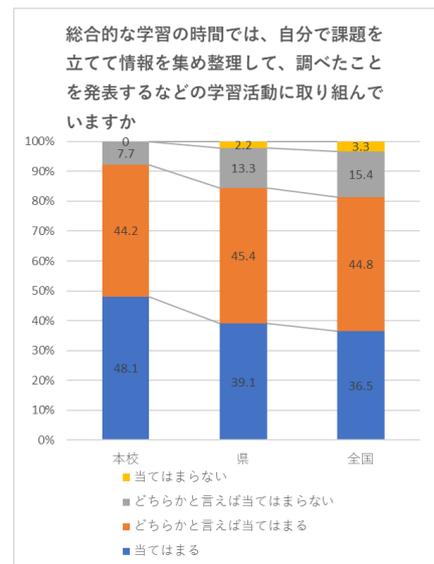


図 30 R6年度の全国学力・学習状況調査における児童質問紙「総合的な学習の時間」項目の割合

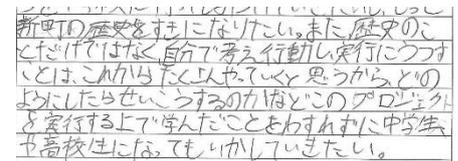


図 31 他のものに応用できるスキルや態度に関心をもつ児童の振り返りシート